

# 学校英語教育での授業見学の実施と分析

## ～授業の実践研究と外国語教育政策の提言に向けて～

遠 藤 忍

慶應義塾大学SFC 総合政策学部2年

s07154se@sfc.keio.ac.jp

## ～ 目 次 ～

I. 本 論	2
1. 研究の目的	
2. 授業見学にあたって	
3. 授業見学①（中学校）	
4. 授業見学②（小学校）	
5. 授業見学の反省・改善点	
6. まとめと今後	
II. 作成資料	11
III. 参考文献／引用文献一覧	20

# I. 本 論

## 1. 研究の目的

### 筆者の主張と研究の背景

2008年に公布された新しい学習指導要領において定められた中学校外国語教育の目標には「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成<sup>1)</sup>」という文言がある。また、この学習指導要領改訂から小学校に外国語活動が導入された。その目標もまた「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成<sup>2)</sup>」と定められている。

国の外国語教育政策がこれだけコミュニケーション能力を重視しているにも関わらず、学校教育を受けている児童・生徒の間では、未だに学級崩壊現象やいじめ、不登校などの問題が絶えず起こっている。筆者はこの原因を、「意味や感情をやりとりすること」(齊藤：2004,p.2)という意味におけるコミュニケーションの希薄化にあると考える。殊に現代の子ども達は、対面による会話コミュニケーションをうまく活用できていないのではないだろうか。

筆者は、学校教育における外国語教育とくに英語教育の存在意義は、そうした対面による会話コミュニケーションの素養と態度を育成するところにあると考える。この場合の会話コミュニケーションとは、決して英語によるそれではなく、日本語を含めた普遍的な会話コミュニケーションを意味するものである。すなわち筆者は、

### 日本の学校英語教育の目標は、普遍的な対話コミュニケーション能力の育成におかれるべき

であると主張する。特に、思春期で多感な時期を過ごす中学生こそ、他者との会話コミュニケーション能力を身につけるべきであると考えている。

### 研究のテーマ

筆者は、上記の主張を長期的な研究における根本とし、英語教育政策に対して何らかの提言を行えるようになることを目標としている。

そこで筆者は、茨城県の公立中学校において、会話コミュニケーションを扱う課外活動を取り上げ、

1. 行われている学習活動そのもの
  2. 学習者の、英語やコミュニケーションに対する意識、態度の変化
  3. 指導における教師の立場
- に着目した長期的研究を行うことを考えている。

### 研究のプロセスと手法

研究にあたっては、茨城県で開催されている英語インタラクティブ・フォーラム<sup>3)</sup>を取り上げ、指導ボランティアという立場からの実践研究を中心に行う予定である。これに付随して、実際の英語教員の授業実践を見学し、得られた知見を実践研究に活かすことも検討している。

実践研究の手法として、アクション・リサーチが挙げられる。これは、佐野正之の定義によれば、「教師が授業を進めながら、生徒の力も借りて実践を反省し、改良していく継続的な授業研究」(佐野：2000,p.9)である。

この手法の一つに授業観察があり、この手法は実践研究だけでなく授業見学においても利用ができる方法である。

### 本研究の目的と位置づけ

本研究では、筆者が本格的にアクション・リサーチを用いた実践研究に入る前の段階として、授業観察の手法を用いた授業見学を試験的に実施する。

事前に作成した「授業観察シート」及び「分析フレームワーク」の使用を通じて、その妥当性や使用感を検討し改善をはかるものである。

本研究は、長期的な研究計画のなかで、手法の妥当性を検討するパイロット調査であるため、見学した授業そのものよりも、見学の際の手法に対する着目が強いものとなることを、あらかじめ断っておきたい。

<sup>1)</sup> 第2章 各教科 第9節 外国語 第1 目標

<sup>2)</sup> 第4章 外国語活動 第1 目標

<sup>3)</sup> 英語インタラクティブ・フォーラムとは「3～4人のグループに分かれ、与えられた課題(テーマ)に基づき、各自が、決められた時間で自分の考えを話した後、英語を用いた自由な話し合いを5分間行うもの」である(卯城：2008)。

## 2. 授業見学にあたって

### 授業見学の観点

授業見学にあたっては、前章の「研究テーマ」の項で述べた3つの着眼点に基づき、以下に挙げる観点を中心に見学を行うこととする。

#### <授業>

- ・その授業ではどんなクティビティが行われているか  
(特徴)

#### <教師>

- ・教師は何を目標に授業を組み立てているか (意図)
- ・教師は授業をどのように構成しているか (進行)
- ・教師はどのような発言をしているか (立場)
- ・教師は授業をどう振り返るか (反省)

#### <生徒>

- ・生徒はどのように活動に参加しているか (態度)
- ・生徒は授業/活動をどう思っているか (評価)
- ・生徒は外国語/コミュニケーションに対してどう思っているか (意識)
- ・生徒の意識はどのように変わっていったか (変化)

### 授業見学のプロセス

研究における授業見学活動は、授業観察の手法のうち参加観察法<sup>4</sup>に基づき、また上記の観点到即ちで行うことを想定している。

まず、見学前に教師に対して授業計画をインタビューし、意図や授業予定、クラスの雰囲気等を事前把握する。同時に、クラスの生徒に対して彼らの意識を問うアンケートを実施する。

実際の見学においては、上記の観点到即ちして自由にメモを残し、可能ならば写真や映像を撮影する。

授業後には、実施した授業についての教師の反省をインタビューする。また、生徒の意識の変化を分析するためのアンケートの実施やインタビューを行うことを想定している。

授業内容の整理と分析のためのフレームワークを用意し<sup>5</sup>、これを埋めることで授業内容を整理し、最終成果として見学報告を作成する。

### 観察で使用するもの

前述のプロセスに従って、授業観察においてはあらかじめ記入枠をつくった「授業観察シート」を用意した。

これは、

- ・担当教師への事前調査アンケート
  - ・基本情報シート
  - ・授業中シート
  - ・生徒向けのインタビューシート  
(授業後に生徒に実施するための質問項目)
  - ・教師向けの事後インタビューシート
- から構成される。

基本情報シートには、日時、担当教師、場所、対象、クラスサイズ、教材、授業の目標、全体の流れ(計画)、教室配置、クラスの雰囲気をメモする欄をつくり、教師への事前インタビュー時あるいは授業開始前に記入を済ませる。

授業中シートは、授業計画に基づき、活動の変わり目ごとに枚数を重ねる。活動形態とその内容、授業内で筆者が感じたことを記入する「主観メモ」と授業内で教師や生徒から出る発言をメモする「発言メモ」の欄を作成した。

また、生徒の意識を比較分析するためのアンケートも用意した。

### 整理・分析で使用するもの

授業見学の終了後には、そこで得た知見や疑問を整理し分析する作業が必要であると考え。

そこで、その整理・分析にあたっては、すでに授業観察の手法で使用されているフレームワークや筆

<sup>4</sup> 参加観察法とは、「観察したことやその授業の特徴を細かく記述していく方法」であり、「授業で実際に起こっていることを先入観や検証すべき仮説を設けず、ありのまま自由に記述」することができる方法である(中森：2000,p.199)。

<sup>5</sup> 参加観察法では、カテゴリーを利用しないことが特徴とされるが、筆者はこの原則は観察の最中に適応されるものと解釈し、分析・整理の手段として一定のフレームワークを利用することは可能と考える。

者の観点に近い理論を基にしたカテゴリを使用するのが妥当であると判断した。

2008年7月の段階では、

- ・ マスローの三角形
- ・ COLT

のフレームワークを活用することを検討した。

マスローの三角形<sup>6</sup>を用いることで、生徒達が英語学習において自己実現之欲求を持つために、学習環境がより低い次元の欲求が満たされているかどうかということを分析することができると考えた。これは、学習者の視点から授業がどのように運営されているか、学習者にどのような影響があったか、という点を整理し分析するのに役立つと考えられたため、採用した。

COLT<sup>7</sup>については、相互作用分析における分類であり、本来は授業観察中に利用するものである。しかし、この分類方法は「授業内容を詳しく分類すると同時に、さらに、コミュニケーション活動にも焦点を絞」っている(中森：2000,p.196)。このフレームワークを用いれば、会話コミュニケーション中心の活動そのものを分析しうると考え採用した。

しかし、これらの分類方法を使用する上ではいくつかの問題があり<sup>8</sup>、もっと基本のレベルのフレームワークが必要と考えた。そこで、筆者自身の「授業見学の観点」と、授業見学報告書に盛り込む観点をベースとした分析フレームワークをつくった。後者に関しては、自ら考えて、肯定的評価、改善への示唆、得られた知見、授業への疑問の4カテゴリで分類した。

これらのフレームワークを用いて、各観点について100～200字程度の枠を作成し、観察シートの内容を各観点到合わせて記述し直していった。

なお、観察シートと整理・分析シートはセクションIIの作成資料に掲載する。

## 本研究での見学先

今回の研究では、茨城県古河市の公立中学校と公立小学校の2校で授業を見学することができた。

これは、2008年度から筆者が古河市教育委員会の英語指導サポーターとして登録されたことにより、この立場で参加した。また、見学した授業は、どちらも古河市内の英語科教員どうしの研究授業として行われたものである。

今回の授業見学の実現にあたっては、古河市教育委員会指導課指導係長の中村勝則氏の協力により実現できたことを報告する。

なお、詳しい報告は第3章で述べるものとする。

## 3. 授業見学①（中学校）

### 見学の概要

本研究における第1回目の授業見学は、平成20年11月26日に、茨城県古河市立三和中学校にて行った。先に述べた通り、今回見学した授業は古河市内の中学校の英語科教員を対象に公開された研究授業である。この学校では現在、英語の習熟度別授業が展開されており、今回公開対象となったのは3年3、4組の生徒を「基礎1」「基礎2」「応用」の3クラスに分けた授業である<sup>9</sup>。

筆者はこのうち、「基礎1」コースを授業見学の題材とした。その理由は2点ある。第1に、ALTが参加する授業であったこと、第2に、ゲーム要素や会話要素を含めた授業計画がなされていたこと、である。

教科書は東京書籍「New HORIZON 3」であり、3クラスとも扱う単元は「Unit 6 20th Century Grates」であった。この単元では、歴史上の人物：ことにレイチェル・カーソンを取り扱い、その

<sup>6</sup> マスローの三角形とは、「アメリカの心理学者Maslowが、成人が自己実現を成し遂げるためのステップを説明した理論を、応用言語学者のE.Stevic(1976)が外国語学習に適応した」ものである。下位レベルから、生理的欲求、安全への欲求、所属への欲求、尊敬への欲求、自己実現の欲求の順である。(佐野：2000,p.17)

<sup>7</sup> COLTは、アレン他が開発した「コミュニケーション活動を重視する英語の授業を分析するための新しいカテゴリー」である。(中森:2000, p.196)

<sup>8</sup> これらについては第5章にて述べる。

<sup>9</sup> なお、クラス分けは、テストの結果をベースに本人の希望や生徒指導の観点をふまえて構成される。

なかで関係代名詞 (who・which) の用法を学習するものであった。3クラスとも授業回数は5回目であり、コミュニケーションやアウトプットが中心の授業構成となっていた。指導内容や展開は、基本的に生徒に対するアンケートを基にしていることが、指導案を読んで分かった。

## 授業の進行と内容

基礎1コースの授業展開は、

1. ウォーム・アップ  
(挨拶とショートトーク)
  2. ゲス・ワットゲーム  
(単語を英語で説明して当てるゲーム)
  3. 今日のポイント  
(ターゲットセンテンスを板書で確認)
  4. いろいろな職業を知る  
(関係代名詞文を使った職業の説明文)
  5. 職業当てインタビュー  
(ジェスチャーを交えたクイズとwho文を用いた会話)
  6. 関係代名詞を使ったライティング
- という順序で展開した。詳しくは、セクションIIの作成資料に授業中シートを添付してある。

授業は日本人教師とALTとで、13人の生徒を対象に行われた。教師は極力英語を使用したり、ジェスチャーや擬音語を利用して説明を行っていた。ゲームやインタビュー活動等、他の生徒とコミュニケーションをする機会が多かった。また、ライティングの時には、書いた文を教師二人が丁寧に添削し、黒板に書いて全員で共有した。

なお、関係代名詞文はwhoの他にwhich文もあるが、基礎コースということで、who文を集中的に扱っていた。

## 使用した見学素材

今回使用した見学用の素材は以下の通りである。

- ・ 基本情報シート
- ・ 授業中シート

以下、使用しなかった素材については、その理由として、

- ・ 担当教師への事前調査アンケート  
→担当教師と面識がなく、また時間的な制約で実施できず。指導案をもってこれの代用とした。
- ・ 生徒向けのインタビューシート  
→生徒に対して話しかけるタイミングがなかったこと、「非構造化」インタビューとしてしまったことで、質問が思い浮かばなかった。
- ・ 教師向けの事後インタビューシート  
→授業終了後すぐに研究討議に入ってしまったため、インタビューをする時間が確保できなかった。研究討議内での発言を記録することとした。

今回の見学では、筆者がデジタルカメラを持参し忘れてしまったため、記録写真や映像等を残すことができなかった。

## 今回の感想・反省

今回の授業見学は初めての経験ということで、戸惑うことも多く、記録作業も手間取ることが多かった。

まず反省点として、授業観察シートの発言メモ欄を3色ペンで分けて記述するという方法に手間取った。当初は、筆者の主観を黒で、教師の発言を赤で、生徒の発言を青で記すこととしたが、それぞれのペンを持ち替えて記入することに気を取られてしまった。

3色ペンの色分けという原因もあったが、思ったことを素早くシートに記録する作業はすぐにできるものではなく、感じたことに対して手の動きが追いつかないことが多かった。

また、授業に関して事前に知り得る情報が少なかったため、クラスのレベルを判断することができなかった。結果的に、生徒のレベルは当初筆者が想像していたものよりも低かった。また、授業を見学していた他の教員によれば、見学対象としては「基礎2」のほうが有効であったかもしれない、という示唆もあった。

生徒達のなかにもっと入って、声をかけたりしながら感想を聞いたり、授業終了後のインタビューを試みるという試みも、積極的に行うべきだったと思う。このことについては、「見学者・観察者の存在がそれを受け入れる教師や学習者に、そして結果としてその日の授業全体にプラスに、あるいはマイ

ナスに影響する可能性がある」(森田：2004,p.32)という指摘があるが、反面生徒のなかに入っていくことによってより多くの質的データを収集できると思う。今回はこの点で、データ収集不足となった。

また、前項でも述べたが、カメラ等の機材を持参し忘れてしまった。ただし、撮影や録音は担当教師の許可が必要なだけでなく、撮影・録音行為が妨害となる可能性は否めない。とはいえ、そもそも持参し忘れるというのは大きな失態であった。

## 4. 授業見学② (小学校)

### 見学の概要

この回の授業見学は、平成20年12月5日に古河市立古河第二小学校にて行われた。三和中学校と同様に、今回の授業も研究授業として教員に対して広く公開され、さらに今回は市内のほとんどの小学校・中学校から教員が参加していた。

新指導要領から小学校における外国語活動が必修化されたが、今回はその外国語活動の時間が公開対象であり、5年1組での授業実践を見学した。

文部科学省は、外国語活動用の教材として「英語ノート」を発行しているが、この学校ではこの教材を使用していない。しかし、英語ノートでも題材の一つとされている童話「かぶ」を扱った授業展開を行っている。今回は、この「かぶ」の単元の第3回目、「かぶ」の英日の朗読音源を聞き、英語と日本語を対比させておもしろいことばや不思議なことばを発見するという活動であった。なお、単元は全部で10回で構成され、最終目標としては、全員で「かぶ」の英語劇を行うというものである。個の最終目標から考えると、今回の授業は導入期に位置づけられるものである。

今回の授業研究のテーマの一つに、歌やゲームをどう扱うか、ということがあり、授業前半では英語の歌・ゲームを用いた活動を行っていた。このシーンでは、参加した市内の教員の多くがカメラやビデオで撮影をしていた。

### 授業の内容と進行

今回の授業展開は、

#### 1. 挨拶&ショートトーク

2. 英語の歌①「Hello」  
(歌に合わせて相手の名前を呼びながら握手を交わしていく)
3. 英語の歌②「7 Steps」  
(歌に合わせて円をつくりダンスを踊る。その後教師が言った数字にあわせてグループを組み替えていく、というゲーム)
4. 「かぶ」の英日朗読を聞く  
(英語→日本語の順に読まれる朗読を聞き、気になった言葉等をメモしていく)
5. メモの共有・グループワーク  
(メモしたことをグループで共有する。気になった言葉は付箋に記入し、それをB4の紙に貼付けていく)
6. 発表の時間(各班による発表)  
という順序で展開した。

授業計画では、このあともう一度CDを聞いて、それにあわせて発音をする予定であったが、時間の関係でそれができなくなった。

### 使用した見学素材

今回使用した見学用の素材は以下の通りである。

- ・基本情報シート
- ・授業中シート
- ・半構造化インタビューシート (児童向け)
- ・対教師事後インタビューシート

前回の中学校での見学の反省を基に、授業中シートと半構造化インタビューシートに改善を加えた。

授業中シートの発言メモ欄は、教師が赤、生徒が青、筆者のメモが黒と色分けをしていたが、色分けではなく欄を分けることにした。

授業後の生徒・児童向けのインタビューシートであるが、あらかじめ設問を示しておきつつ自由にメモができる半構造化インタビュー用のシートに変更した。

また、対教師事後インタビューシートであるが、今回も前回同様に、授業終了後すぐに研究討議に移ってしまったため、直接のインタビューはかなわなかった。しかし今回は、研究討議で担当教師が最初に話した授業後のコメントを全て録音し、後にこ

れを文字起こしした後、インタビューシートの設問に当てはめていく作業を行った。

また今回は、歌・ゲームの実践も研究授業の大きな内容となっていたため、カメラによる撮影が許可されていた。そこで、

- ・歌・ゲーム実践の映像
- ・グループワーク成果や板書の写真
- ・グループワーク発表中の映像
- ・「かぶ」の音声

をデジタルカメラを使用して撮影した。

## 今回の感想・反省

今回の授業見学は、長期的な研究テーマで対象とする中学生の実践ではなかったにしろ、現在話題になっている小学校英語教育に関して示唆にとんだないようであったと思う。その点で非常に価値のある見学になったと思う。

さて、手法の運用については、観察シートの改善もあって、前回よりも余裕を持った見学ができたと感じた。撮影機材を持っていくことにより、手書きメモでは補えない発言を収集することも可能となった。

また、今回は対象が小学生ということもあり、比較的情意面での敷居が低かったため、できるだけ子ども達に話しかけようとした。事実、グループワーク中や授業終了後に話しかけることで、彼らの感想を得ることができた。

反省点としては、今回もまた事前に知り得る情報と事後に生まれた疑問の解決がほとんどできなかった。今回も事前情報はインタビューではなく指導案で代替したが、指導案だけからすべてを読み解くことは困難である。

アンケートについては、あえて実施しなかつたと言ってもよい。そもそもアンケートを児童に依頼するだけの時間がなかったことと、作成したアンケートの設問が小学生に向いているとは言い切れなかったためだ。とはいっても、当初から観点として掲げていた児童の意識とその変化を知ることができなかったのは残念である。

## 5. 授業見学の反省・改善点

### 授業見学活動について

2回の授業見学を通じての反省点として、2つの点を挙げるができる。

第1に、授業のどこに注目をして、そしてどのように起こっていることを見通すのか、ということについては、かなりの訓練・経験が必要という点である。あらかじめ授業見学の観点は挙げているものの、実際に授業を見るなかで、なにが本当に重要な発言なのか、この教材や活動はどんな力を身につけさせるためのものなのかなどを、その場で気付くということは非常に難しい。

たとえば、中学校の見学のとき、明らかにやる気なく教室にただいるだけ、という生徒を見かけ、筆者はそのことを否定的に捉えた。しかし、研究討議においては、その生徒が50分間席に着いていたことに対して肯定的に評価した教員がいた。「基礎1」コースの生徒のなかには生徒指導上困難のある生徒もいることを考えると、授業が成立していることだけでも評価すべきことであった。

このような視点が、まだ2回しか経験していない筆者には身に付いているとはいえない。それは仕方のないことかもしれないが、今後の観察研究にむけて、精度を高める必要性を感じた。

第2に、見学した授業が「研究授業」という枠組みで行われたことで、通常行われている授業とはおそらく違ったものになったと予想できる点である。教師と学習者しかいないいつもの教室環境とは違って、授業見学者という第三者が入ってくることで、教師も学習者も緊張をすることになる。これは、観察結果にも大小さまざまな結果を及ぼしかねない。

授業見学者が1人ならまだしも、今回見学をした学校は最低でも20人、小学校に至っては教室内の児童と同じほどの数だけ教師がいたのである。今回、こうした環境を選ばざるを得なかったとはいえ、適切なデータを得ることができなかったということは、反省の一つである。

とはいえ、ある一定の視点を定めて、一定の手順に則って授業観察をするという機会を得られたことは、今回の大きな成果であると言える。

## 授業観察シートについて

事前に作成した授業観察シートの一式は、筆者にとって「一番使いやすいのではないかと」予想して作成したものである。そして今回それを使用して、特に事前情報シートと授業中シート、対教師事後・対生徒のインタビューシートはそれぞれ筆者自身にあった使い方ができるということが分かった。

とくに、最初の授業観察を通じてこれらの不備な点を一度改善することができたため、2度目は非常に使いやすかった。

既に述べた通り、授業中シートでは、発言メモ欄をわざわざ3色ペンで記さなくてもよく、むしろ欄を教師と学習者とで分けた方が効果的だった。

また、事前情報シートは、本来教師に対して事前にとった授業計画に関するインタビュー・アンケートを基に記入する予定であったが、指導案を見ながらこのシートを埋めることで指導計画を観察者自身が把握できるようになる効果もあった。

学習者への事後インタビューは、授業見学の観点に沿ってあらかじめ設問を設定しておく方が、少ない休み時間でも効率よく話を聞けることが分かった。

観察中に使用するシート類で更に改善する点があるとすれば、時間の経過を記す、ということが挙げられる。授業の進行順番は分かっても、それがどのような比率で行われたのか、という情報はうかがうことができなかった。授業は、限られた時間のなかで計画的に行われるものであるから、時間も重要となると考えた方がよいのかもしれない。

さて、授業見学にあたっては、学習者の意識や態度を理解するためのアンケートを3種類用意したが、これらを一切実行することができなかった。この原因としては、今回の授業見学は両者ともに教育委員会経由で受け入れていただいたものであり、各担当教員との接点は全くと言っていいほどなかったのである。その状況で、継続的なアンケートの実施にいたらなかった。

アクション・リサーチに基づく実践研究では、自分の授業を客観的に理解する授業分析のみならず、学習者の意識や態度、希望を汲み取るアンケート調査が非常に重要となる。本研究においては当初、アンケート用紙の妥当性と分析のパイロット調査を行う予定であったが、両者ともに叶わなかった。

また、教師に対するインタビューシートも、担当教師と直接の関わりが持てなかったために、設問の妥当性を検討できなかった。

授業計画については、指導案と事前情報シートとをうまく活用すれば理解ができるとしても、事後の自己評価についてはいくら研究討議での反省を聞いても筆者が聞きたい疑問は解決できない。

この、学習者に対するアンケートと教師に対するインタビュー設問は、次学期以降の運用のなかで改善をせざるを得ない。

## 分析・整理のフレームワークについて

あらかじめマスキューの3三角形とCOLT、2種類の文献に明示された理論を応用したフレームワークを用いて整理と分析を試みたが、どちらも一長一短があった。

まず、マスキューの三角形については、整理のフレームワークとしては比較的使いやすいものであったと思う。しかし、「生理的」「安全への」「所属への」「尊敬への」欲求という4つのカテゴリーが、それぞれ一体何を意味するのか、具体的にはどのような状況がこれらの欲求を満たすのかということを具体的に知っておく必要がある。分析シートには、外国語の授業に適應させた時の具体例を明示しておいたため観点が明確化した。それら以外の観点があってしかるべきである。

また、この4つのカテゴリーに基づいた筆者に記述から、これら4つの欲求が段階をおって達成されていたかを理解することはおそらく筆者自身でも難しい。

続いてCOLTについてだが、COLTはもともと相互作用分析で用いる観察方法で、「教師と学習者の発話を正確に文字に起こし、一文単位、あるいは時間軸上に区切った上で、カテゴリーに分類して、カテゴリーの出現率を集計する」(中森：



2000,p.194)方法である。つまり、量的調査に近い手法である。にもかかわらず、筆者はこのカテゴリーを質的調査法である参加観察法の整理と分析に用いた。ここに、若干無理があったのではないかと反省をしている。

決して「全く使い物にならなかった」訳ではなかった。なぜなら、COLTにおける分類は、ある一文やフェーズが持つ機能を分けたものであるが、一部のカテゴリーは、後から授業全体を総括する上で細部を思い出すのに有効であった。

たとえば、「②授業構成-A.全体の構成」にある3つのカテゴリーは、本来なら「文字おこした254文目はこれらのうちどれであったか」という分類をするためのものであるが、「教師の発言」「学習者の発言」「一斉練習」という言葉を見る限りは、「授業全体を通してそれらがどのようなものであったか」ということを振り返るのに適しているとも言える。

そのような項目がある一方で、授業後の総括分析としてはほとんど適さない項目もあった。実際のところ、筆者はそうした項目において、無理矢理記述していた部分もあった。

上記に示した通り、当初は有効利用が可能と考えていたが、実際にはいくつかの問題も発見できた。これらのフレームワークを今後も用いるとすれば、これらの基礎をなす理論を理解した上で、筆者なりの応用を加えなければならない。

ところで、今回は先ほどの2つのフレームワークに加え、筆者自身の「授業見学の観点」と「授業見学報告書に向けた総括分析」というものを独自に作成した。次にこれらを検証する。

まず「授業見学の観点」であるが、これは筆者自身の考えた観点であるが故に、整理する際に4つのなかで最も使いやすいものであったといえる。

ただし、本研究での2回の授業見学では、全ての設問に対して満足な整理、分析ができなかった。その理由は、前項で述べた通り、対教師のインタビュー、および対学習者のアンケートを取らなかったからである。結果、データに基づいた表現ではなく、あくまで筆者が感じ取った「主観」が記述の中心となってしまった。

本来、授業観察の目的は、授業で何が起きているかを客観的に観察する試みであり、だからこそ客観性をもった授業改善プロセスであるアクション・リサーチでも応用されるのである。できるだけ主観性を排除するの観察シートであり、アンケート、インタビューであったにもかかわらず、これらを全て活用できなかったことで、筆者の主観性が表出したのではないかと懸念している。

おそらく授業を見学する際の観点は、今後もこのまま堅持する。しかし、これをフレームワークとして整理、分析を行う際には、できるだけ客観的なデータや観察結果を用いる必要がある。

一方の、「授業見学報告書に向けた総括分析」で掲げた項目も、筆者の主観が中心となってしまったと考える。

こちらは、設問の妥当性に疑問が残る。とくに、第2設問の「授業改善への示唆」は、これを報告書に盛り込むことが妥当か、という問題がある。

授業見学とは「あくまでも同僚間で、対等な立場で行う自己研修活動」(森田：2004,p.21)である。そしてそもそも、筆者が行う授業見学は、同僚という立場ではなく学生と教員という立場である。そのような状況下で「示唆」を行うことは失礼に値する、という観点を持つ必要もあったのではないか。

その一方で、小学校英語教育のように、英語が苦手な担任教師が手探りで授業を運営する状況もあり、だからこそ研究授業を通じて意見を交わしたいと考える教師もいるのではないかと考える。

政策提言を最終目標とする上で、授業に対する何らかの提言を、以下に客観的立場から・客観的データに基づく授業見学の結果を通じて行うか、については、今後も検討の余地がある。

## 6. まとめと今後

### 授業見学で得た知見

本研究の目的は、授業見学という研究手法を実際に経験し、筆者自身が用意した素材やフレームワークの有効性を検討するものであった。

しかしながら、言語教育の政策提言を目的とする筆者の研究テーマのなかで、授業見学という研究手法の最大の目的は、筆者自身の実践研究および政策提言の足場となる「新たな知見」を得ることであ

る。したがって、今回の2回の授業見学から得た知見をもって、本稿のまとめとしたい。

まず、三和中学校における見学で得た知見は、「少人数・習熟度別授業における下位レベルクラスの授業運営」という視点である。

昨今、習熟度別の少人数クラスやティーム・ティーチングの手法がキーワードとなっている。しかし、筆者はそうした授業を経験してこなかった。できる子どもできない子ども同じ教室で学ぶことが当たり前だった筆者にとって、習熟度でクラスを分けることは、まさに未知の領域であった。

とくに、英語の点数やモチベーションの面で低いレベルの子ども達をどのように指導するか、という問題には接したことさえなかった。

授業見学を通じて理解したこととしては、まず身近な題材を言語材料として持ってくること、そして一つのセンテンスや機能について4つの技能からじっくりと取り扱うということである。

見学した授業では、キーセンテンスの解説でドラえもんを使ったり、職業を利用した関係代名詞文の解説を行っていた。そして、whoの関係代名詞の文を読み、聞き、話し、最後に書くという活動を50分のなかでじっくり行っていた。

じっくりと生徒と向き合い、ニーズに応えながら取り組むことが、習熟度別教育において必要なのだと感じた。

一方の古河第二小学校で得た知見としては、小学校の「外国語活動」の在り方についての知見である。

小学校からの英語教育については、様々な賛否があるが、その多くが机上の空論のように聞こえることが多く感じられる。

筆者の立場は、数多くの第二言語習得研究に基づいて考えると、週1時間程度の活動では流暢な英語等身につけることはできないと考えている。それでも「外国語活動」を行う意義はなんだろうか。

その意義が、今回の授業見学で理解できた。すなわち、日本語と英語には違いがあるという言語的気づき、そして歌やゲームを通じてコミュニケーションの楽しさを体感すること、ここに「小学校外国語活動」の意義があるのではないだろうか。これは学習指導要領に記されているものであっても、実際の

授業実践として目にすることはなかなか機会がない。

また、小学校外国語活動においては、授業を担当するのは大半が担任教師である。英語を専門としない小学校教員でも運用が可能な活動カリキュラムを早急に整備する必要があるが、今回見学した授業は、そのカリキュラムの一端を見ることができた。

## 今後の課題と方針

今後の課題としては、本研究を通じて反省点や改善点としてあがってきた事項をふまえ、授業見学に使用する素材やフレームワークを改善する必要がある。

また、授業見学報告書を、今学期の協力への感謝として教育委員会指導係長に提出することを考えている。

さて、本研究で授業研究の方法を練習することができたが、来学期以降は実際に実践研究を行うこととなる。その際に必要となるのが、問題と研究課題の設定である。インタラクティブ・フォーラムを中心とした実践研究を行いたい、という目標があっても、どこに問題を定めて研究を行うか、が非常に重要である。これから来学期にかけて、この点を更に明確化する必要がある。

## II. 作成資料

授業見学で使用した観察シートやフレームワークを以下の順に掲載する。

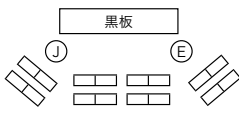
### 古河市立三和中学校

- ・ 基本情報シート
- ・ 授業中シートその1～6
- ・ 研究討議における担当教員のコメント
- ・ 分析用紙

### 古河市立古河第二小学校

- ・ 基本情報シート
- ・ 授業中シート1～4
- ・ 半構造化インタビューシート
- ・ 対教師授業時インタビューシート
- ・ 分析用紙

授業観察シート 基本情報シート

観察者：遠藤 忍	観察日時： H20年 11月 26日 14:35 ~ 15:25
担当教師名：沼田先生	授業場所：古河市立三和中学校
授業の対象：中学3年生 習熟度別クラスのうち「基礎1」クラス	クラスサイズ： 13名 うち男子 7名 女子 6名
主要教材と該当箇所：  東京書籍「New Horizon」3 Unit6 20th Century Grates  この単元は今回が 5回目	補助教材リスト： ・ Guess What card ・ いろいろな職業プリント ・ 職業カード ・ ワークシート (インタビューとライティング)
本授業の目的・目標（事前） ・ 偉人への関心、読んで聞いて知る/理解する ・ 関係代名詞を使った人物の説明レポートを書く ・ 関係代名詞の用法、形、意味を知る  ・ 英文を書く（表現） ・ 英語で紹介できる	大まかに、何をするのか（事前） 1. Warm Up 2. Guess What ゲーム 3. Today's Point 4. いろいろな職業を知る 5. 職業当てゲーム 6. Whoを使って文を書く
教室の配置 	クラスの雰囲気メモ（主観） ・ 教師のテンションが異様に高い ・ 友人同士で固まっているようだ ・ 少人数教室での実施 広報の壁にイギリスに関する掲示

H20.11.26 三和中学校授業見学 見学シート類 p.1

授業観察シート 授業中シートその1

観察者：遠藤 忍	観察日時： H20年 11月 26日
現在の活動内容：Warm Up	
上記以外の場合は記入： 現在の活動形態： 教師の解説 - 個人作業 - ペアワ - グルワ( )人 <u>全体共有</u>	
活動内容を更に詳しく：  手を挙げて、質問に答えさせる	
主観メモ	発言メモ
JET、ALTは英語のみ使用  ・ 今日の日付 ・ 今日の天気 ←ノートにメモらせる ↑ 英語で書いたらそれを2回英語で言わせる  とりえずテンションが高い	Weather? Day? Date? Breakfast?  Finished? ←くりかえし

H20.11.26 三和中学校授業見学 見学シート類 p.2

授業観察シート 授業中シートその2

観察者：遠藤 忍	観察日時： H20年 11月 26日								
現在の活動内容：Guess What ゲーム									
上記以外の場合は記入： 現在の活動形態： 教師の解説 - 個人作業 - <u>ペアワ</u> - グルワ( )人 - 全体共有 - _____									
活動内容を更に詳しく：  リストにあがっている単語を英語で説明してあてるゲーム									
主観メモ	発言メモ								
<table border="1" data-bbox="183 1556 343 1668"> <tr><td>1</td><td>○○○○○○○○</td></tr> <tr><td>2</td><td>□□□□□□</td></tr> <tr><td>3</td><td>△△△△△△</td></tr> <tr><td>4</td><td>◇◇◇◇◇◇</td></tr> </table> <p>↑ こんな感じのリスト どれか選んで英語で説明</p> <p>度々日本語が聞こえる</p>	1	○○○○○○○○	2	□□□□□□	3	△△△△△△	4	◇◇◇◇◇◇	<p>ブーン (車の音まね)</p> <p>I don't know</p> <p>I'm th.... th... (飲む動作)</p> <p>2 minutes! 20 seconds!</p>
1	○○○○○○○○								
2	□□□□□□								
3	△△△△△△								
4	◇◇◇◇◇◇								

H20.11.26 三和中学校授業見学 見学シート類 p.3

授業観察シート 授業中シートその3

観察者：遠藤 忍	観察日時： H20年 11月 26日
現在の活動内容：Today's Point	
上記以外の場合は記入： 現在の活動形態： <u>教師の解説</u> - 個人作業 - ペアワ - グルワ( )人 - 全体共有 - _____	
活動内容を更に詳しく：  黒板の板書でターゲットセンテンスの確認をする	
主観メモ	発言メモ
・ 説明はほぼ英語 ・ ターゲットセンテンスは ドラえもん & ドラえもんの絵	・ 人の時は何使う? Who! ・ ものの時は? Which! ・ もととの意味は? だれ  ・ 共通するものが目的語の時は?

H20.11.26 三和中学校授業見学 見学シート類 p.4

観察者：遠藤 忍		観察日時： H20年 11月 26日	
現在の活動内容：いろいろな職業			
上記以外の場合は記入：			
現在の活動形態：			
教師の解説 (個人作業) ペアワ - グルワ ( )人 - 全体共有 - _____			
活動内容を更に詳しく：			
①個人 - 関係代名詞の文を読んでプリントに書かれた職業をあてる ②解説 - ポキャブラリー練習			
主観メモ		発言メモ	
... who is ~~~~ ... ↑ここが強調されて繰返し  ・ALTが髪を触ってヒントを出す  ・Answerは指名して答える  ・発音→意味  ・声が小さいか？ 落ち着かない・発言しない子もいる		・Strong! strong means...  ・coolって何？ 涼しい！ 涼しいけど、、、かっこいい！  ・listen, listen to music!  ・あ、1番消防士ね  ・あ〜3？  ・PostといえばPostoffice	

観察者：遠藤 忍		観察日時： H20年 11月 26日	
現在の活動内容：職業当てインタビュー			
上記以外の場合は記入：			
現在の活動形態：			
教師の解説 - 個人作業 - ペアワ (グルワ(5)人) 全体共有 - _____			
活動内容を更に詳しく：			
一人ひとりに違ったカードを配り、それを見てジェスチャー →相手が職業を当てて→カードに書かれたwho文を言う  ×5人			
主観メモ		発言メモ	
・個別のカードは 絵-文-モデル対話 ↑英文の上にカタカナのルビ  ・プリント：モデル対話 ジェスチャーしてWho am I?  ・あまりわからない 男はかたまる  ・I'm a ____ who ..... ↑ こちら辺は棒読み  ・恥ずかしがっている		・ジェスチャー付きでね  ・5人くらいでやって  ・very hot <sup>2</sup> あちっ  ・おー読めた読めた  ・自分で言うんだよお前  ・ここにBarberって書くんだよ	

観察者：遠藤 忍		観察日時： H20年 11月 26日	
現在の活動内容：Who を使って文を書く			
上記以外の場合は記入：			
現在の活動形態：			
教師の解説 (個人作業) ペアワ - グルワ ( )人 (全体共有) _____			
活動内容を更に詳しく：			
- インタビュー時の友達の職業をwho文に落とし込む ⇒前で先生のチェック→黒板に書く - 最後に全体共有 (書いた子が読む→みんなで読む)			
主観メモ		発言メモ	
・カードのwho分は全てプリントに書いてある (名前) is ~~~ who .....  ・JETチェックは少し文法寄り？ ALTチェックはコミュニケーション  ・ALTはシールを配っていた  ・丸を付けながらもスペルミスは訂正  ・発音を待たずに教師がアシスト  ・who文の解説はうすい？		・じゃこれ黒板に書いて  ・おお me 1番に書かれてるう  ・え 全員書くんですか？  ・is a desk  ・フフフ in English!  ・is a 前 teacher (Mr○○ teacher is a)  ・つくってくれた文を読みましよう	

沼田秀人先生  
 -基礎1コースの子も達は、出来ない子や生徒指導上不安のある子が多い。英語の授業においても発言や発表などで埋もれてしまう子どもばかりである。そこで、逃げられない状態での発言の機会を与えている。  
 -基礎1コースは落ち着いているからこそ出来るコースでそもそも座らせるのさえ大変だった。子ども達も慣れてきて、コミュニケーションや読みが出来るようになってきた。  
 -しかし、得意な子ども達と高め合う方が良いのか、というジレンマがある。  
 -出来るだけ楽しいと思えるものや身近なものを利用して関係代名詞を使うように工夫した。  
 -どのようにすればレベル別の授業を盛り上げられるかが課題である。

Sam Law先生 (遠藤訳)  
 -彼らは話すことが得意であると思う。それに熱中して取り組んでいる。  
 -また、声も大きく発音していた点が非常に良かったと感じる。

他の教員からのコメント  
 -沼田クラスは一つのセンテンスに対して4つの技能のアプローチをそれぞれ使っていた  
 -一番後にいた子は最後まで良く我慢して授業に出ていたと思う

## ①授業見学の観点に即した記述

<授業>

その授業ではどんなアクティビティが行われているか（特徴）

ウォームアップとしてのショートトークと、Guess What ゲーム(リストに書かれた単語を英語で説明して当てる)を経て、関係代名詞whoを使った職業に関する様々な文を聞きプリント内の絵と対応づける活動、そしてカードとワークシートを用いて、他者のカードに書かれた職業をジェスチャーで当て、その職業に関する関係代名詞文を話す/書くという活動を行っていた。

<教師>

教師は何を目標に授業を組み立てているか（意図）

関係代名詞を使った紹介/説明の表現ができるようになること、とくに書けるようになることを目標としている。クラスが基礎コースであるため、whoを使った人の紹介ができるようになることを目指した。また大きな背景として、いかに身近な題材を用いて英語に・英語によるコミュニケーションに興味を持たせるかという課題も存在していた。

教師は授業をどのように構成しているか（進行）

最初の挨拶、ショート・トーク活動、Guess Whatゲーム、関係代名詞のポイント解説、いろいろな職業についてのwho文のリズニングと職業当てクイズ、生徒どうしの職業当てジェスチャーと関係代名詞文の発話、最後に友達のカートの職業について関係代名詞文を書く活動、という流れで授業を構成していった。

教師はどのような発言をしているか（立場）

沼田先生は、子ども達に対するヒントをことばで示すことが多い。また、生徒の口から正解を出すように、正解を誘導するような質問をすることが多かった。一方のSam先生はことばよりもジェスチャーや音等を使ったヒントの出し方が目立っていた。いずれの場合も叱責に至るような発言は見られない。また授業中かなりの割合で両者が英語を使用していた。

教師は授業をどう振り返るか（反省）

子ども達も慣れてきて、コミュニケーション出来るようになってきたと評価している。出来るだけ楽しい素材や身近な素材を利用することを心がけたと考えている（沼田先生）。話すことに楽しみや得意を感じている。それに熱中して取り組んでいる、と評価している。声が大きく発音されていたことを非常に評価している（Sam先生）。

コミュニケーション能力育成のための中等教育における外国語教育の考察と実践 - その②授業見学をしよう

## 授業見学：分析用紙

見学対象：古河市立三和中学校3年生 英語基礎1コース

見学日時：平成20年11月26日

担当教師：沼田秀人先生/Sam Law先生

<ルール>

- ・各項目につき四角におさまるだけの文字数で書くこと
- ・授業見学シート、各種メモ、映像、写真などを参照しながら主観で書くこと
- ・プラスの内容とマイナスの内容のバランスを保つこと
- ・今後の改善のための記述を含むこと

①授業見学の観点に即した記述	2
②マスローの3角形に即した記述	4
③COLTの分類による記述	5
④見学報告書に向けた総括分析	8

授業見学用 分析用紙 @ 古河市立三和中学校

p.1

<生徒>

生徒はどのように活動に参加しているか（態度）

クラスサイズが少ないだけに、ほとんどの生徒がしっかり参加しているが、活発に発言などをする生徒の姿は見られない。後の方の席には、座っているがやっとなんかというレベルの生徒もいる。また友人同士で固まってしまい、クラス内を自由に動ける活動でも固まりの枠を飛び出してインタラクションすることはあまり見られなかった。

生徒は授業/活動をどう思っているか（評価）

動きは活発でないという印象を受けたが、それでも自発的に各種活動に取り組んでいる印象が強い。Guess Whatゲームにおいても、職業当てジェスチャーでも、近くにいる友人同士でしっかり活動する姿が見られ、また自分たちで教え合う姿も見れることから、生徒達は授業を肯定的に捉えて参加していると思う。決して嫌々ではないという印象がある。

生徒は外国語/コミュニケーションに対してどう思っているか（意識）

コミュニケーションへの敷居は下がってきているにしろ、英語に対しては苦手意識や「できない」意識を持っているようである。ただ、ゲームなどのアクティビティの取り組みを見る限りは、そうした活動に対して楽しいという感情を持っているようである。

生徒の意識はどのように変わっていったか（変化）

今回1課の授業を見る限り、「関係代名詞を使えるようになった」という劇的な変化を見ることはできない。

授業見学用 分析用紙 @ 古河市立三和中学校

p.3

授業見学用 分析用紙 @ 古河市立三和中学校

p.2

## ②マスローの3角形に即した記述

生理的欲求

(物理的な教室環境、学習活動のメリハリ)

典型的な教室環境ながら、教師を常に見ることができ、また教師の目が届きやすい環境であった。イギリスに関する掲示物があることから、外国語授業に適した教室といえる。今回の学習内容には一連の流れがあったものの、生徒達ははじめを持って諸活動に取り組んでいた。ただたまにおしゃべりが見られた。

安全への欲求

(教師の態度(威圧的?やさしい?)、個人のニーズへの対応、「分かる」授業)

ALTはやさしかったがJETはそれに比べて少し高圧的だった印象を持ってしまった。しかしながら二人とも優しい印象はあった。授業の内容は、文法的な説明は標準よりも簡易で分かりやすかったと言える。

所属への欲求

(教室内の連帯感、個々の生徒に対する着目)

各自の書いた文章を一人ひとり見るなど、個々人に対して目の行き届いた指導ができていた。しかし、教室内は友達同士や男女ごとで固まってしまっているため、連帯感が生まれているとは必ずしも言いがたい。しかし、全体での発音練習等で連帯感を生み出そうとしているのは見て取れる。

尊敬への欲求

(加点法による評価)

各自の書いた文章に対して、まずは丸を付けてからスベルミスの訂正をするなど、頭ごなしの減点法ではない点で、非常に評価できる。会話アクティビティでも、言えたことに対してALTから「Good」などの声をかけてもらえる点でも、尊敬への欲求を満たしていると言える。

### ③COLTの分類による記述

#### Part A：教室の出来事

##### ①活動の記述

黒板にポイントとなるセンテンスが常に書かれていた。また職業当てクイズのプリントが拡大されて貼ってあった。

##### ②授業構成

A. 全体の構成  
1 教師の発言

ほとんどが英語で発話されており、生徒の発話を誘導するような質問がなされていた。友人同士のような指示が多かった。

2 学習者の発言

基本的に小さい声であるが、ペア/グループ活動中にお互いにアドバイスしたり、教師に質問したりする発言が見られた。

3 斉練習

全員で声を合わせて発言するのはポイントとなるセンテンスの復唱のとき。生徒側の声は小さく感じた。

B. グループ学習  
1 同一の課題

Guess Whatゲームで、クイズを出す/答える。職業当てインタビューでの言い合い活動

2 個別の課題

個別の活動として思い当たるものは、職業当てインタビューの後の文章を書く活動。

C. 学習者個人の学習

インタビューの後に文章を書く活動、職業当てクイズのリスニング

D. BとCの混合

職業当てインタビュー以降の活動はB→Cの順番で学習がなされる

##### ③授業内容

A. 運営/進行

1 方法の説明や指示

自分で言って、黒板に書いて、などという指示が多く見られた。生徒達は素直にしていた。

2 注意や叱責

目立った注意や叱責は見られない

B. 外国語の説明

1 形式

関係代名詞のwhoおよびwhichについて、先行詞との関係などを簡単に説明していた

2 機能

関係代名詞の機能について関係詞との関係から説明していた。そして、職業を例にとってその用法を説明していた

3 談話

ALTによる例示、および言い合いを通じた談話体験をしていた

4 社会文化的要素

社会文化的要素に当てはまる解説は見られなかった

C. その他活動

1 挨拶・出欠

日付や天気について質問し、それをノートに記述させた

2 ショート・トーク

朝食や日付、天気について一人ひとりに質問して挙手で答えさせていた

3 議論や意見

議論や意見が自発的に出ることはなく、教師による誘導が多かったように思える

D. 主題の設定

関係代名詞の文を扱うことは教師の口から明示されていた。また黒板にポイントとなるセンテンスが書かれていた

##### ④学習者の活動

学習者は、話す・聞く・書く活動を行っていた。とくに考えて話したり友人とインタラクションする活動が多かった

##### ⑤教材・教具

A. 種類

1 読み物 (単文/物語)

読み物はなかった

2 聴覚教材

リスニング音声はなかったが、ALTが文章を読むことはあった

3 視覚教材

ワークシートが多用されていた (職業カード、インタビュープリント)

B. ソース

1 付属教材

教科書の使用は見られなかった (活動内容に依拠すると思われる)

2 付属教材以外

ワークシート類の他に、ドラえもん絵を黒板に貼っていた (黒板上の例文がドラえもん例にしたセンテンスだった)

C. 使用法

1 単一目的

Guess Whatゲームのリストや職業当てクイズ用のカード

2 複数目的

ワークシートは聞く/書く/話すの3技能横断型で作成されていた

#### Part B：コミュニケーションの要素

##### ①目標言語の使用

A. 母語の使用

生徒達の母語使用は多かった。教師の母語使用は、活動の説明や細かな所の説明にのみ使用されていた

B. 外国語の使用

教師はほとんどが英語使用になっていた。一方の生徒はアクティビティ時に頑張っ使おうとしていたレベルだった

##### ②インフォメーション・ギャップ

A. 情報要求

生徒からの質問の発話は、アクティビティ時にワークシートに書かれたもののみ見受けられた

B. 情報提供

情報提供の発話も、アクティビティ時にワークシートに書かれたものが見受けられた。それ以外については、教師の助けがあった

##### ③会話練習

会話練習はゲームとインタビュー活動のなかで計20分ほど行われていた

##### ④教師の反応

教師は生徒達の成果物に対して肯定的な反応・評価をしていた。ALTの方がどちらかと言うと反応が大きかった

##### ⑤(教師)の対応・訂正

教師はスペルミスや語順ミス等の訂正を行ったり、生徒からの質問を受けている以外には積極的な関与は見られなかった

##### ⑥学習者の自主的発話

学習者からはジェスチャーで自発的にhotなどの形容詞を使ったり、お互いに教え合いが発生したりする光景が見られた

##### ⑦言語活動の種類

A. 変形などの練習

それぞれの職業に合わせたwho文の変形があった

B. 簡単な応答練習

スキットに即した応答練習が見られたが、その応用はなかった

C. 自由発話、発表

各自の書いた文章の発表に終始していた

### ④見学報告書に向けた総括分析

#### 授業全体を通じた肯定的評価

モチベーションや学力的に低い生徒に対して、一つのセンテンスをじっくり指導するという点と、身近な題材や楽しい言語材料を使用した授業展開をしていた点が評価できる。ALTとうまく連携を取って、飽きさせない授業を展開していたように思う。また、最後の書くアクティビティでは、それまでにやってきたアクティビティを最終的に書く行為につなげ、そして生徒一人ひとりに対してじっくり添削を行っていた点が、モチベーションと表現力に繋がると思った。

#### 授業の改善への示唆

ワークシートの見栄えにもう少し工夫があっても良かったかもしれない。もう少し見やすい絵等を使用してはどうか。また、題材となった職業だが、もうすぐ現実味のある職業があっても良かったかもしれない。最初のGuess Whatゲームと職業当てゲームの内容の関連性があると、更にスムーズな導入ができたのではないかと。生徒達に与えるヒントは、子ども達の予測ストラテジーを付けさせる意味で、もう少し待っても良かったのではないかと思う。

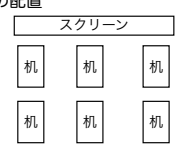
#### 授業から得られた発見・知見

モチベーションや学力が低い生徒に対する指導方法の示唆を得られたと思う。特に、一つのセンテンス・表現をじっくりと取り扱うこと、身近な題材や楽しいと思える活動を取り入れるということである。しかし、ずっとゲームばかりをするわけにはいかない。今回の授業では、ゲーム要素を取り入れながら、聞く/話す/読む/書くの技能を関連づけて、最後に成果を出すことで達成感を味い、また教師からのフィードバックを得ることで次に繋がるという構成を理解した。

#### 授業についての疑問

授業開始当初から今までに生徒達はどのような変化を遂げてきたのか。単元の導入部分ほどのように扱うのか。身近な題材や楽しい活動を取り入れる中で、教科書はどのように位置づけて活用しているのか。

授業観察シート 基本情報シート

観察者：遠藤 忍	観察日時： H20年 12月 25日 13:40 ~ 14:25
担当教師名：斉藤 浩子 先生	授業場所：古河第二小学校 食堂
授業の対象：5年1組	クラスサイズ： 28名 うち男子 ?名 女子 ?名
主要教材と該当箇所：  童話「かぶ (Turnip)」  p  この単元は今回が 3回目	補助教材リスト： ・CD (歌・かぶ) ・「かぶ」の絵本 ・めあてカード ・付箋 (ことばのメモ) ・ワークシート ・プロジェクター (絵本の投影) ・挨拶カード
本授業の目的・目標 (事前) - おもしろいことば、心に残ったことばについて話し合い、英語と日本語の違いやそれぞれの良さについて興味関心を持つことができる  - ワークショップを通して、ことばについているいろいろな発見をし、感じたことばを自分の言葉で表現することができる	大まかに、何をするのか (事前) ・始めの挨拶 ・英語の歌 (Hello, 7 steps) ・かぶのリスニング (英日) 気になったことばのメモ活動 ・メモの発表、分類、共有 ・かぶの英語リスニング CDと一緒に声に出す
教室の配置 	クラスの雰囲気メモ (主観) ・とりあえず活発 ・「先生ガンバレ！」 ・周囲の大人に興味

H20.12.05 古河第二小学校 授業見学 見学シート類

p. 1

授業観察シート 授業中シートその1

観察者：遠藤 忍	観察日時： H20年 12月 5日
現在の活動内容：はじめの挨拶	
上記以外の場合は記入： 現在の活動形態： 教師の解説 - 個人作業 - ペアワ - グルワ( )人 <u>全体共有</u>	
活動内容を更に詳しく： ・5人を立たせる ・一人ひとりにHow are you? ・最後に全体でHow are you?	
主観メモ (授業を見ていて感じたことを記入) ・5人を立たせる時は出席番号？	
・ほとんどの答えは I'm fine, thank you! ・Sleepy と答える子どもが多い ・全体のときに数人がHappy!と答えた	
発言メモ (教師)	発言メモ (学習者)
Sleepy ねむい だよ	happy! It's sleepy. I'm sleepy.

H20.12.05 古河第二小学校 授業見学 見学シート類

p. 2

授業観察シート 授業中シートその2

観察者：遠藤 忍	観察日時： H20年 12月 5日
現在の活動内容：英語の歌	
上記以外の場合は記入： 現在の活動形態： 教師の解説 - 個人作業 - ペアワ - グルワ( )人 <u>全体共有</u>	
活動内容を更に詳しく： Hello: 2人ペアを組み替えながら名前を言いあう 7 Steps: 円でまわりながら歌う→教師の指示した人数で集まる 一人残ってしまったら、1、2、3、 <u>fine(?)</u> で変なポーズをする	
主観メモ (授業を見ていて感じたことを記入) ・すごく顔がイキイキしている ・まわったり移動時が危なっかしい ・音楽が徐々に早くなってくる	
発言メモ (教師)	発言メモ (学習者)
・two girlsって言うてるのに ・目が回らないように！  7 Stepsの数字の順番： 5→7→G2:B3→3+1→10-4 →G3:B3	・はやくはやく！ ・おい！ ・ちゃんと丸くなって！ ・4だ4だ！(3+1と言われて) ・あと6人！

H20.12.05 古河第二小学校 授業見学 見学シート類

p. 3

授業観察シート 授業中シートその3

観察者：遠藤 忍	観察日時： H20年 12月 5日
現在の活動内容：かぶのリスニング①	
上記以外の場合は記入： 現在の活動形態： 教師の解説 - 個人作業 - ペアワ - グルワ( )人 <u>全体共有</u>	
活動内容を更に詳しく： めあての確認→プリント配布→リスニング→ワークシート記入	
主観メモ (授業を見ていて感じたことを記入) ・めあてカード (日本語) は白板に貼ってみんなで言う ・大津研シンボで聞いたCDだ！ (英語→日本語の音声) ・見てない子どもも少しいる (ほとんどは絵に注目) 教師も絵本を見せるが見えない プロジェクタの文字も小さい ・見ながらワークシートに記入	
発言メモ (教師)	発言メモ (学習者)

H20.12.05 古河第二小学校 授業見学 見学シート類

p. 4



観察者：遠藤 忍	観察日時： H20年 12月 5日
現在の活動内容：ワークショップ（メモの発表・分類・共有）	
上記以外の場合は記入：	
現在の活動形態：	
教師の解説 - 個人作業 - ペアワ - <u>グルワ(5)人</u> <u>全体共有</u>	
活動内容を更に詳しく： おもしろい、心に残った、不思議、好きなことばを付箋に書いて、理由をそえてB4の更紙に貼っていく	
主観メモ（授業を見ていて感じたことを記入）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・めあてにそって活動できていたか</li> <li>・正しく聞けていないけど、楽しんでいる</li> <li>・ネコ、ネズミの鳴き声の違いに気付いている</li> </ul>	
発言メモ（教師）	発言メモ（学習者）
<ul style="list-style-type: none"> <li>- はい じゃもうちょっとかけておこうか</li> <li>- ウォーターピックタイニー！すごい聞き取りですね</li> <li>- (ネズミのネタを受けて)動物の鳴き声！</li> <li>- ちょっと、今日はことばなんだけど（絵本からの気づきを発言した子に対して）</li> <li>- 一生懸命に聞いてくれたんだね</li> <li>- タニップってのもありますね！</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- ターニャってきこえた（何回も聞こえたから）</li> <li>- 先生ヘルプ！</li> <li>- 日本語次に出てくるから、大きいかぶって分かる！</li> <li>- ウォーターピックタイニー</li> <li>- ダ・ケームアウト</li> <li>- エリザベス</li> <li>- 同じ風に聞こえるはずなのに違う表現</li> </ul>

質問a. 今回の授業で何が楽しかったですか？

質問b. 今回の授業で、分かったことは何ですか？

質問c. 英語の勉強（授業）は好きですか？

質問d. \_\_\_\_\_

インタビュー① 男子・女子 a. C Dでできた ベータニブチョ b. 変なことば c. d.	インタビュー② 男子・女子 a. エリザベス b. 宇宙人のことば 人によって捉え方が違う c. d.
インタビュー③ 男子・女子 a. b. c. d.	インタビュー④ 男子・女子 a. b. c. d.

対教師事後インタビューシート その1

教師名：斉藤 浩子 先生	日時： H20年 12月 05日
実施場所：食堂（研究討議にて）	授業終了後の研究討議内
<p>Q 1 授業後の感想を聞かせてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- この授業は計画プログラムが私にぴったりなのかな、と思いました</li> <li>- 日本語がとっても多いので、英語が不得意でも進められるかなというのがありました</li> <li>- 子ども達のいろいろな面が見られて私はすごく楽しく授業ができました</li> </ul>	
<p>Q 2 生徒たちは、指導内容を理解することができたと思いますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 今回のことばで言うのはどの程度子ども達に下りるんだらうって、私自身はもしかしら出てこないんじゃないかって懸念をしたんですが、続けことばでだいぶんいろいろなことばを聞き取っていた</li> </ul>	
<p>Q 3 当初の到達目標は達成されたと思いますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- いろいろなことばを聞き取って、しかも子ども達の感想が、いろいろな風にみんなが聞かえているのが分かっておもしろかったですなんていう風に発表していた</li> </ul>	

対教師事後インタビューシート その2

<p>Q 4 事前に計画・意図した通りに授業は進行了でしょうか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 指導案は自分で計画を立てて、自分でこんな風で持っていこうと思うものを、あるプログラムの中から自分にそれを取り込んで、自分なりに授業を組み立てていってかかっていう...悩みはありました</li> <li>- 今回最初にゲームや歌を取り入れることによって、すごい子ども達がリラックスをするんだなぁと新たな発見をしました</li> </ul>
<p>Q 5 生徒の授業態度や活動意欲、授業中の反応についてどう思いましたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 毎日帰りの会の反省の中で「英語が楽しかったです」って出るくらいにすごく喜んでやってくれていた</li> <li>- 「え、今までこんなに意見でたっけ」っていう感じの、子ども達もすごい様々な意見が出てきたんで、「あ、これは歌とゲームの効果なのかしら」と思って授業してきました</li> </ul>
<p>Q 6 今回の授業内容をふまえ、次回授業はどのように実施しようと思いますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 担任が楽しんでやるのが子ども達も楽しめることだと思っているので、まず私が楽しくやるうと心がけました</li> </ul>

## ①授業見学の観点に即した記述

<授業>

その授業ではどんなアクティビティが行われているか（特徴）

最初に、英語の歌を使用したウォームアップのゲームを行う。先生の指示で特定の人数が集まるゲームをしている。その後、童話「かぶ」の英日の音声をリスニングしておもしろいことばを探して班の中で共有・話し合い活動をしている。

<教師>

教師は何を目標に授業を組み立てているか（意図）

おもしろいことばや心に残ったことばを探し、日本語と英語の違いに興味を持てるようになること、そして興味を持った違いや感じたことばを自分で表現することが目標である。また前提に、英語を用いてコミュニケーションする楽しさを体験させることも目標としている。

教師は授業をどのように構成しているか（進行）

最初に英語によるあいさつ(How are you?)を言い合い、次に英語の歌を振り交えて体を動かしながら歌い、体をリラックスさせる。次に「かぶ」のリスニング活動をワークシートを用いて行う。そして先ほどのリスニング活動で見つけたおもしろいことばを班で共有し、全体発表をする。

教師はどのような発言をしているか（立場）

児童の出したアイデアを繰り返して発言し、またたくさん聞き取りができていないことをほめていく。反面、授業の主題に反する意見に対しては「今日はことばはなんだけど…」と修正を促す発言も聞かれる

教師は授業をどう振り返るか（反省）

英語が不得意と感じる教師であったが、楽しく授業を進めることができたと感じている。指導計画を一定のプログラムの中から取り込んで企画することに不安を感じていたが、子ども達がかどばの発見をたくさんできたことに対して安心している。また、ゲーム要素を最初に行ったことで子ども達がリラックスしたと発見している。

コミュニケーション能力育成のための中等教育における外国語教育の考察と実践 - その②授業見学をしよう

## 授業見学：分析用紙

見学対象：古河第二小学校5年1組

見学日時：平成20年12月5日 13時～

担当教師：斉藤 浩子 先生

<ルール>

- ・各項目につき四角におさまるだけの文字数で書くこと
- ・授業見学シート、各種メモ、映像、写真などを参照しながら主観で書くこと
- ・プラスの内容とマイナスの内容のバランスを保つこと
- ・今後の改善のための記述を含むこと

①授業見学の観点に即した記述	2
②マスローの3角形に即した記述	4
③COLTの分類による記述	5
④見学報告書に向けた総括分析	8

授業見学用 分析用紙 @ 古河第二小学校

p. 1

授業見学用 分析用紙 @ 古河第二小学校

p. 2

<生徒>

生徒はどのように活動に参加しているか（態度）

英語の歌・ゲームに対しては体を思いっきり動かして楽しんで取り組んでいた。リスニング活動中は一部集中力がなげほとんど真剣にワークシート作成に取り組んだ。班内共有や全体共有時は活発に意見を出したり、他者の意見を真剣に聞いている姿が見られた。

生徒は授業/活動をどう思っているか（評価）

授業内の活動は、導入活動と本活動ともに積極的に進んでいることから、楽しい活動だと評価しているようである。「次回の授業でもまた聴きたい」という内容の感想も持っている児童がいる。

生徒は外国語/コミュニケーションに対してどう思っているか（意識）

外国語（特に英語）に対しては、未だ不思議なことば（宇田人のことば・方言みたい）という感覚を持っているようである。他者とコミュニケーションすることについては、大きな障壁なく取り組んでいるようであった。

生徒の意識はどのように変わっていったか（変化）

日本語と英語の比較によって、両者の間にある差異に対して興味を持つようになったといえる。また意味が分からないはずの英語も、その後発音される日本語によって予測ができるようになったのではないだろうか。

授業見学用 分析用紙 @ 古河第二小学校

p. 3

## ②マスローの3角形に即した記述

生理的欲求

（物理的な教室環境、学習活動のメリハリ）

食堂を使用したことで、通常教室よりも明るく・広々とした教室を確保することができていた。ゲーム活動の際にも十分な環境を確保していた。授業は、それぞれの活動が流れる状態にならずに済んでいた。ゲーム・リスニング・話し合い・共有の活動がそれぞれけじめを持って行われていた。

安全への欲求

（教師の態度(威圧的?やさしい?)、個人のニーズへの対応、「分かる」授業）

教師は終止、児童に近い目線で授業を行っていたと評価できる（怒ることはなかった）。授業内容はきわめてシンプルかつ分かりやすいものだったため、この点への児童の不安は見られなかった。

所属への欲求

（教室内の連帯感、個々の生徒に対する着目）

最初のゲーム活動や班活動の導入で、教室内の連帯感を取ることができたと思う。しかし、全員での発音は日本語による「めあて」の読み上げのみで、「かぶ」の発音まで至らなかったのが残念。ゲーム活動や班活動において、教師が1班ずつじっくりと活動を見ていたとは言えない。

尊敬への欲求

（加算法による評価）

班活動における共有は意見のぶつけ合いではなく、単なる共有に終始していた（逆にこれが心理的に安心となる）。教師は子ども達の発見をしっかりほめていた。

授業見学用 分析用紙 @ 古河第二小学校

p. 3

授業見学用 分析用紙 @ 古河第二小学校

p. 4

### ③COLTの分類による記述

#### Part A：教室の出来事

##### ①活動の記述

めあてカードを常に黒板に書いておくことやワークシートの存在を通じて「何をするのか」が明確になっていた。

##### ②授業構成

###### A. 全体の構成

###### 1 教師の発言

子ども達の発言を多く吸収し、たくさんリスニングができたことをほめる発言が多く見られた

###### 2 学習者の発言

たくさん発見した不思議なことばのものや、不思議なことばに対して持った印象や感想を発言していた

###### 3 斉練習

一斉練習に夜発音は見られなかった

###### B. グループ学習

###### 1 同一の課題

聞き取ったことばを付箋で共有し、理由や感想をメンバー内で話し合い書き出す。

###### 2 個別の課題

学習者個別で与えられた課題はなかった

###### C. 学習者個人の学習

「かぶ」の音声を聞き、①心に残った、おもしろい、好きなことばを書き取る。②その理由を述べる。③その感想を書く。

###### D. BとCの混合

C→Bの順番で連続して行われた

#### ③授業内容

##### A. 運営／進行

###### 1 方法の説明や指示

個人活動の始まる前に少し説明があった。あとはグループ活動中に個別の指示があった。

###### 2 注意や叱責

ほとんど見られなかった。主題と奉公し絵が異なった発表に対して修正の注意が行われた。

##### B. 外国語の説明

###### 1 形式

形式の説明はなされなかった

###### 2 機能

機能としての説明はなされなかった

###### 3 談話

談話としての説明はなされなかった

###### 4 社会文化的要素

社会文化的要素ととれる説明は一切見られなかった

##### C. その他活動

###### 1 挨拶・出欠

最初の挨拶は日本語で行われた

###### 2 ショート・トーク

How are you? 問答や、英語の歌 (Hello・7 Steps) を行った

###### 3 議論や意見

グループ活動における意見の出し合いがこれに相当する

##### D. 主題の設定

今日の「めあて」を全員で復唱した

#### ④学習者の活動

学習者はリスニング後に、聞こえてきたことばをピックアップして、感想・理由を述べ、これをグループ内・クラス内共有した

#### ⑤教材・教具

##### A. 種類

###### 1 読み物 (単文/物語)

なし

###### 2 聴覚教材

「かぶ」の英日音源、英語の歌のCD

###### 3 視覚教材

「かぶ」の絵本とこれを取り込んだパワーポイント

##### B. ソース

###### 1 付属教材

教科書付属の教材ではない (指定教科書は存在しない)

###### 2 付属教材以外

「かぶ」の関連教材はすべて独自のものである。また、ワークシートは教師が独自に用意したものである

##### C. 使用法

###### 1 単一目的

全ての教材 (「かぶ」・英語の歌CD) がそれぞれの用途でのみ使用されていた

###### 2 複数目的

複数目的にまたがる教材は見られなかった

#### Part B：コミュニケーションの要素

##### ①目標言語の使用

###### A. 母語の使用

日本語を使用した話し合いが主であった

###### B. 外国語の使用

歌を歌う時やHow are you?に回答するときのみ英語が聞こえた

##### ②インフォメーション・ギャップ

###### A. 情報要求

情報要求する発話は見られなかった

###### B. 情報提供

How are you?に対する応答時のみ、情報提供となる発話 (応答) があった

##### ③会話練習

How are you?応答のみであった

##### ④教師の反応

教師は児童に対して好意的で、児童の取り組みに対しましてはほめる姿勢であった

##### ⑤(教師)対応・訂正

そもそも「誤り」がほぼ存在しないため、誤りに対する対応・訂正は見られなかった

##### ⑥学習者の自主的発話

グループ活動時に自分の成果を主張しようとする発話が見られた。もちろん日本語であった。

##### ⑦言語活動の種類

###### A. 変形などの練習

なし

###### B. 簡単な応答練習

導入時のHow are you?のみ

###### C. 自由発話、発表

グループ活動時の会話(日本語)、全体共有時の発表(日本語)

#### ④見学報告書に向けた総括分析

##### 授業全体を通じた肯定的評価

なによりも子ども達が元気に・活発に授業に臨み、多くの「ふしぎなことば」を発見できたことが成果であると思う。リスニング活動に真剣に取り組んでおり、結果リスニングが発生した多くの英語をかなりCDに近い形で聞き取ることができた。それを教師が全て吸収してほめていた点、モチベーションの観点で評価できる。歌・ゲームは、体を動かしてコミュニケーションの下地をつくる意味では最初に行ったことが評価できる。

##### 授業の改善への示唆

リスニングの音声を聞き取れていたが正確なものではないことは分かっている。今後英語で「かぶ」を発音していく上では、より正確な聞き取り・シャドウイングができるようになってほしい。またCDを使わずにALTによるゆっくりな発音を聞かせても同様・あるいはそれ以上の効果があったかもしれない。7 Stepsの時には、できるだけ英語を使用するように児童たちに促し、集まるときに英数字で発言ができるようになってほしいと思う。また安全への配慮が必要だ。

##### 授業から得られた発見・知見

子ども達は、かなり多くの言語的発見ができる能力を持っている。また、英語→日本語の順で音源を聞くことで、完全に「なんと」言っているかは分からなくても「どんな内容を」言っているのか予測を立てる能力を持っている。英語に対して苦手意識を持っている教師でも、授業時間中に扱う活動内容によっては授業に取り組むことができるということが分かった。外国語活動の英語習得目的以外の意義が理解できたと思う。

##### 授業についての疑問

プロジェクトを使用して「かぶ」の絵を投影したのはなぜか (CDの音源のみでも子ども達は集中してきたかもしれない)。グループワーク時に付箋を利用したのはどのような意図か (お互いの発言をメモしていく活動も考えられる)。「かぶ」以外の単元にどのように取り組んでいくつもりか。ALTを活用する予定はあるか。

# 参考文献／引用文献一覧

- ・ 2008.3, 中学校学習指導要領, 文部科学省告示,
- ・ 2008.3, 小学校学習指導要領, 文部科学省告示,
- ・ 齊藤 孝, 2004, 『コミュニケーション力』, 岩波新書, 東京: 岩波書店,
- ・ 佐野正之・奥山竜一・酒井善久・宇喜多宣穂・中森誉之, 2000, 『アクション・リサーチのすすめ——新しい英語授業研究』, 英語教育21世紀叢書, 東京: 大修館書店,
- ・ 卯城祐司, 2008, 「わが地域の英語教育の取り組み 茨城県編 双方向型のコミュニケーション能力育成を目指して」, 『STEP英語情報』, 東京: 財団法人日本英語検定協会, (HTML版: <http://www.eiken.or.jp/eikentimes/chiiki/20080101.html>, 2009.01.31確認),
- ・ 森田昌美, 2004, 『現職者研修としての「授業見学」—その有効性と問題点—』 「ドイツ語教師トレーニングプログラム ドイツ語教員養成-研修——外国語としてのドイツ語教育」日本独文学会研究叢書028, 日本独文学会.